愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学　第33巻　第2号　31 -48　2001

『坊っちやん』自筆原稿に見られる虚子の手入れの認定

佐　藤　栄　作
（国語学研究室）

0　はじめに

筆者はすでに，『坊っちやん』自筆原稿に認められる高濱虚子による手入れ（本文の変更）について報告してきた[1]。ここでは，その一部修正を含め，あらためてどの部分を虚子の手とするかについて，認定に至るまでの手順をまとめておきたい。

現段階において筆者が認める虚子の手入れ箇所は，表１のとおりである。日本方言研究会第70回研究発表会，阪神近代文学会第19回研究発表会において示したものと若干異なる[2]。◎は確実に虚子筆であると判断するもの，○はほぼ確実と考えるもの，△は漱石筆とは言い難いが虚子であると確認できでいないもの，？はなお検討中のもの，×は漱石の自筆（漱石自身の推敲）と考えられるものである。本稿は，判定の最大のよりどころである仮名（ひらがな）の形状についての調査結果を示し，このように判定する理由を述べたものである。虚子の手入れを認めることで生じる諸問題－虚子の変更意図，『坊っちやん』にとっての手入れの意味－等については，稿を改めたい。

1　検討の対象

ここで漱石か虚子かというのは，一言でいえば筆跡の問題である。インクの色の微妙な違い，字の重なりなど，実物の原稿を詳細に調査すれば，明らかになる事柄も多いはずである。しかしながら，それがかなわないという現実の中で頼りとなるのは，『坊っちやん』原稿の複製，またそれと同時期に書かれた二人の他の自筆原稿である。筆者が比較のために用いた漱石自筆原稿，虚子自筆原稿の多くは，すでに公にされている写真，複製のうちのいくつかであって[3]，とても充分とは言いがたい。その点でも，本格的な筆跡の比較対照とはいえない。ただし，逆に，以下に示すことは一部を除いて，多くの人が手にすることが可能な範囲の資料を用いたものであり，誰もが同様に試みることができる作業である。そういう点では，判定について批判・疑問・異論等を，活発に戦わせることができ，それはかえって利点であると考えている。

表１は，先行研究である新垣1978と山下（渡部）1994で虚子筆ではないかとされる箇所に，筆者が一部気付いたものを加えて作成した。新垣1978，山下（渡部）1994それぞれで虚子筆と認めた箇所に○を付した。新垣は対象を松山言葉に絞っているため，それ以外についてはどのように判断していたか不明（よって―）。また，山下（渡部）で判断を保留しているものは？とした。

また，山下（渡部）にはないが，渡部1994では虚子筆としているものを※とした[4]。山下（渡部）は，新垣とは独立に調査・検討した結果であり，両者の一致率の高さは，『坊っちやん』において，漱石筆とは認められない箇所の存在が，ある個人の思い込みや偏見によって生み出されたものではないことを示している。筆者も，できる限り先入観を持たないように見ていったが，やはり先行２文献がともに虚子筆とした箇所のほとんどは，筆者もまた漱石の手とは認め難かった。

松山言葉修正の依頼を含む虚子宛書簡（漱石→虚子，明治39年３月23日）の存在と，当時の「ホトトギス」の編集の状況から，原稿に手を入れられるのは虚子以外には考えにくい。状況証拠からは，原稿本文に関わる漱石以外の手は，そのまま虚子とできる。しかし，ここでは念のためにそれが虚子の手であることを確認していきたい。その作業の中で，両者のうちどちらか決定しにくい箇所の判定や，これまで取り上げられていなかった問題箇所の指摘が可能となろう。

2 『坊っちやん』原稿の仮名

『坊っちやん』原稿の仮名（ひらがな）の形状について，同一字に複数の字体が認められるもの―すなわち異体仮名が用いられているものを挙げる。[5]

「お」…字母「於」に近い／於１／（木ヘンに２点に近いもの）は，松山方言の変更部分にしか見えない。

「か」…字母「可」が圧倒的に使用されており，字母「加」の仮名は本文変更部分にしか見えない。しかも１例を除いては松山方言変更部分。

「く」…松山方言変更部分の１例のみ現代の字体と一致する／久２／（屈曲一つ）で，他は全て字母「久」に近い／久１／（屈曲二つ）。

「こ」…松山方言変更部分の１例のみ字母「己」で，他は全て字母「古」。

「し」…一例のみ字母「志」，他は全て字母「之」。

「た」…字母「多」がやや多いが，字母「太」もかなり使用されている。

「な」…現代の字体と一致する／奈２／よりも，カタカナの「ホ」に近い／奈１／の方が多く用いられている。

「に」…字母「仁」と字母「尓」がともに用いられている。

「は」…字母「波」が多いが，前半で字母「者」も用いられている。わずか２例だが字母「八」も見られる。

「も」…松山方言変更部分では横棒（点）が二つの／毛１／。他は横棒（点）一つの／毛２／で，例外は１例。ただし／毛２／と／毛１／の差は，字体差ではなく，字形タイプの違いとすべきか。[6]

「よ」…現代の字体と一致する／与１／と，少数だがムスビのない／与２／とが用いられている。

「り」…１例のみ字母「里」，他はすべて字母「利」。

「る」…上部が横に平たい／留１／が多く，釣針のような／留２／は松山方言変更部分のみ。これも，字体ではなく字形のレベルとすべきか。

「れ」…字母「連」と字母「礼」の両方が見られる。

ほぼ松山方言変更部分にのみ限定した字体の仮名が見られる「お」「か」「く」「こ」「も」「る」

が注目される。これらすべて一人の手によるとすると，松山方言の推敲時にだけ，他とは異なった字体の仮名を使用したことになる。これは，ありえないと断言はできないものの，可能性は極めて低いというほかない。

次に，同一字体に基づいていると思われるが，字形タイプが複数認められるものを挙げる。

「い」…丸みの強いものと直線的なものが見られる。

「う」…松山方言変更部分に，全体を一筆で書いた「そ」の異体のごときものが見える。

「え」…本文中の多くは漢字「元」に似て，第1画が水平な横棒。漢字「之」に似たものも見られる。

「し」…字母「之」，曲げのない縦棒ようなものは2例のみ。

「な」…字母「奈」，松山方言変更部分では，ムスビの最後が右上方向，他は右下。(7)

「や」…松山方言変更部分では，第2画の点が第1画に包まれるようなタイプ。他は皆，点は上方にある（交差しないものが多い）。

「ら」…点よりも縦の起筆位置の方が上になっているものがあるが，松山方言変更部分にはない。松山方言変更部分のは，点がほぼ縦向き。

「れ」…字母「礼」，第2画にカギのあるタイプとないタイプの両方が使用されている。

「ん」…松山方言変更部分では，斜め縦の後，かなり平べったく緩やかに右に抜く。

このうち，「な」「や」「う」は極めてはっきりした特徴であり，注目される。これら字形タイプの偏在は，字体の用い分け以上に，別筆か否かのヒントになりうる。なぜならば，一人の人物が複数の字体を用いることは意識的にも可能であるのに対し，複数の字形タイプの使用は，意識的とは思われない。もちろん，一人の人物が複数の字形タイプを用いること自体は何でもないことだが，字形のレベルは，知らず知らずのうちに書いてしまう「癖」とも言えるものだから，それがある部分に限定的に存在するというのは不自然というほかない。(8)

以上のような，仮名の形状の特徴とその偏在から，およそ次のようなことが言える。

○／於1，加，久2，己，毛1，留2／を使用している変更（加筆）部分は，漱石とは別人の手である可能性が高い。

○ムスビが右上向きの「な」，第2画が第1画に包まれるような「や」は漱石とは別人である可能性がかなり高い。

○一筆の「う」は，速筆の影響のように見えるが，そうとうのスピードで書いたとわかる部分でも漱石は二筆で「う」を書いており，一筆の「う」は別人である可能性がかなり高い。

以上『坊っちやん』内で見られるこうした仮名の形状の特徴と偏在について，ほぼ同時期の漱石の他の原稿，同じく虚子の原稿との比較を行なう。

表2は，『吾輩は猫である』の九回目の原稿の1枚目（＊印は最終回の最末1枚），虚子の『お丁と』（41回目13枚目右，57回目1枚目右），『坊っちやん』78枚目（78枚目に無い字，字体，字形タイプを他から補った）を比較したものである。まず，『吾輩は猫である』を左に，次に『お丁と』を右にして，間に『坊っちやん』を置いた。両者（さらにここで挙げていない資料も参考にして），『坊っちやん』の仮名（ひらがな）を分けた。右の『坊っちやん』は，結果として表1で◎○とした変更部分の仮名，左の『坊っちやん』は虚子の可能性のない仮名である。作業の過程と結果を一つにしたのが表2である。『坊っちやん』の最終回では横棒2本の「も」が用いられているものの，他については，先に別人の手ではないかとした字形は，いずれも『お丁と』にも見られる虚子の筆跡の特徴であることが確認できる。

3　虚子筆認定作業

虚子筆の可能性ありとされる表1に挙げたものに付した◎○等の判定は，以下のように下した。表1の1～86は松山方言に関わる部分，A以下は関わらない部分（Nは語順の入れ換え，Oはルビ）である。なお，表では一つの番号を付けたが，変更部分が一連の行為ではない可能性を含むもの（26，32，79）は，ab二つに分けて検討した。また，漢字が関わるものは後でまとめて述べる。

表2でも歴然としているように，ムスビの末尾が右上に抜けるタイプの「な」を含む部分は虚子の手としてよいと筆者は確信する。これによって，4，5，7，8，11，14，15，16，18，19，20，23，25，27，35，36，50，62，66，67，72，Fが，虚子による変更となる。「あんた」を「あなた」に変更したのはすべて虚子の手であることが明らかになった。さらに，この「な」とともに書かれている字も虚子筆でなければならない。そこでは，例は少ないながら，「お」は／於1／，「か」は／加／，「る」は／留2／，「く」は／久2／が用いられている。また，「ら」の字形もかなりはっきり異なる。これらに基づけば，1，12，21，22，41，44，45，56，77，80，G，Kも虚子としてよいと判断する。[9]

虚子の「な」とともに書かれた字としては，「も」「し」「と」「さ」「の」「そ」「た」「い」「て」がある。「も」はすべて横棒2本，「い」は直線的であるという特徴を有する。「の」は他の字と同じ大きさで書かれており，漱石の「の」が総じて小さいのと異なる。「そ」も漱石ほど傾いていない。また「さ」の第2，3画は離れている。しかし，「も」は『坊っちやん』にも1例，漱石の／毛1／があり，『猫』最終回では皆2本である。「し」以下の字の特徴も，それをもって「な」を含まない部分の判定に用いられるかというと若干躊躇される。

他方，「な」とは別に，漱石と虚子で字の形状のはっきり異なる仮名が存在する。まず，「や」であるが，漱石と虚子の書き癖はかなり異なる。32a，51，55，79aが虚子とできる。「う」（漱石は速筆であっても「う」が一筆になっていない）から73，「え」から57も虚子としてよい。さらに，「よ」の字形と「ひ」（45の「ひ」に酷似）から47も。カタカナの「ホ」に似た「な」（21，22と酷似）から81も加えられよう。

ここまでに挙げた42箇所については◎とした。

次に「もし」だけ（13は「も」だけ）の例であるが，横棒2本の／毛1／は虚子である可能性が高いと考える。すでに触れたとおり，100パーセントとは言いがたいが，前後の本文変更と比較して，「もし」のみの追加は漱石であるとする方が不自然である。よって，9，10，13，17，24，26b，29，30，32b，33，34，37～40，43，46，53，54，58，59，61，63，65，68～70，74～76，78，82，83，以上33箇所は限りなく◎に近い○とする。[10]

「もし」に関わる追加としては最後の3例である84，85，86が問題である。この3例の「も」はよく似ており，いずれも横棒1本である。「も」の字からは漱石の手となる。しかし，84の「し」は曲がっておらず，漱石の「し」が1例を除いて曲がっているのに反する。虚子筆には直線的な「し」がある。86の「な」をもって漱石か虚子かを判断することも難しい。漱石自身が推敲によって「なもし」を追加した箇所が，本文中にないことも気になる。この3例は？としておく。

上記以外は，個別に言及する。

3「どうして」は「し」「う」「て」の形状から，虚子とできそうだ（○）。
6「それでも」も「そ」「で」「も」から，虚子の可能性が高い（○）。
26b，79b「の」は大きさから，虚子であろう（○）。
49「てゝ」は「て」の形状から虚子であろう（○）。
52「ん」は「ん」一字だが，虚子としてよさそうだ（○）。
60消されている「えらう」は漱石。「えつぽと」は「え」の形状から虚子と思われる（○）が，「ほ」は漱石に似る。
71「た」は，その形状から虚子の可能性が高い（○）。
2「あろ」は字の形状からは判断しがたい（？）。細やかな方言の修正だから虚子でなければ不可能であるように思われるが，Jの「あるま」の「あ」と酷似している。Jの方は漱石自身推敲の可能性が高いと考える（？）。
42「まあ」も字からは判断しがたい。「あ」は漱石に近い。補入のための引き出し線の曲がり具合も漱石的，？としておく。
48「とき」も字形からは判断しがたい（？）。方言の修正部分であるから，虚子の可能性も。

AかLまでは，松山方言以外の変更である。書簡で漱石が依頼したのは方言の修正であるから，これらが虚子と認められるなら，虚子の独断による修正ということになる。しかしながら，校正レベルの手入れなら，編集者虚子にとって当然行なってよい作業のはずである。ここでは，変更内容の質についてはあえて触れず，仮名字形から導かれる判定を掲げるにとどめる。

B「ふ」は非漱石的，直し方も虚子的（○）。
C「もや」を「靄」にしてルビをふった箇所。ルビの「もや」は虚子的特徴（○）。
D「では」は漱石の字とは異なるが，虚子と確認できていない（△）。
FGKはすでに虚子とした。
H「ん」，形状は一見虚子風。ただし終筆部分がかなり上向きに払っている（？）。
I「おき」は芸者の関西弁の部分だが，「お」は／於2／，「き」も漱石風（×）。
L「いい」の「い」は直線的で虚子か（○）。
N　語順の変更，(?)とするが注⑽参照。
O「それぢや今日」の部分は漱石自身の推敲。「今日」のルビ「こんにち」の「こ」の字形から，このルビ部分のみ虚子では（○）。

漢字が関わるものについても，『坊っちやん』内の同じ漢字の形状，両者の他の原稿の同字の形状をつぶさに見ていく必要があるが，現時点では充分にはできていない。それを承知の上で，現時点で表1に掲げた理由等についてまとめておく。

A1～5は「吉川」についてである。変更部分ではない本文中の「吉川」と比較すると，5例いずれも異なるように見える。強いていえば1，2は漱石筆とできそうだが，3から5は漱石筆とは認めにくい。5は3，4とも異なるように見えるが，「吉」の第一画を誤って長く書き過ぎたため形が崩れたのであろう。1，2は×（漱石），虚子の「吉」が確認できていないので3～5は△としておく。

28の「大方」も微妙だが，「方」の右カギの画の形状から，虚子筆の可能性が高いとしたい（○）。

31，64の「當」は，本文中の「當」の多くが草書的なのに対して，31は崩しが異なり，64は楷

書的である。64のような形状の「當」は本文中にも見られ，字形からは漱石とする方が有力。ただし，この両例は，「ほんに」を「本当に」に訂正したものであり，漱石自身は「本当」は皆漢字で書いているから，訂正する場合にも，「ほん」をそのまま残さずに「本当（本當）」と直すのではないか。31を○，64を？としておく。

E「其で」は，「其」の字形も非漱石的。また『坊っちゃん』では，「それ」は「夫」，「その」は「其」とはっきり使い分けられており，「それで」に「其」が用いられた例はここだけ。よって，漱石自身の推敲とは考えられない。虚子の自筆資料に，類似した字形の「其」が見出せていないので，現時点では△としておく。

M この「船」のみ舟ヘンに「公」で，他の「船」と異なっているので検討が必要であると判断し，？とした。

4　判定結果について

結局，◎が42箇所，手がかりが「も」なので慎重を期して○としたものが33箇所，その他で○としたものが14箇所，以上89箇所（表１の番号では86箇所）は虚子の手入れと判断する。表１で示す通り，そのほとんどは新垣，山下（渡部）も採っており，うち68例は新垣，山下（渡部）両者とも虚子筆とした例である。おそらく，冷静に原稿を眺めれば，ほとんどの者が同じように－70～80箇所は虚子の手と－判定すると予想される。『吾輩は猫である』や『お丁と』等との比較を行なったのは，冒頭で断ったように，「念のための確認」であった。

△とした５つは，虚子の自筆原稿等をさらに調査することで◎に変更できると思われる。そうでなければ，虚子以外のさらに別人を想定しなければならなくなるからである。５例中の３例を占める「加藤」を「吉川」に正して「野だいこ」の姓を統一することは，編集，校正レベルの問題であり，誰かがやらなければならない作業である。そういう意味では，誰の手であっても構わないのであるが，さらなる人物の設定は，やはり全体の筆跡判定に影響を及ぼしてくる。ただ，虚子以外の編集担当など存在しない，印刷業者（文選工，植字工）が本文に手を入れるなどということはありえない，筆者にはそう断言できないため，現段階では△とせざるをえないのである。断言できる調査者なら，◎とするところである。？とした11箇所については，調査者によって判断がかなりゆれることが予想される。また，ここには挙げなかったが，？を付けてもよさそうな箇所が他にないわけではなく，調査者によってはもう少し多く俎上に挙げてくるかもしれない。

あらためて◎○としたものを見直すと，89（86）箇所中，82（79）例までが松山方言に関わる部分であった。このことは，すでに仮名の字体や字形タイプの偏在を指摘する段階からわかっていたことでもある。しかし，松山言葉以外への虚子の手入れが数例に過ぎないということは，明らかな誤りなら訂正（校正）しても許される立場にあった虚子としては，少ないのではないか。岩波新『漱石全集』第二巻の校異や高木1999で明らかなように，原稿にはなお衍字や清濁の誤りなどいくつも残っているのである。つまりは，印刷前の段階では，時間が切迫していたこともあってか[11]，原則として漱石から依頼された松山言葉の修正しかやっていないことが確認できる。本当に，気がついたところだけしか手を入れていないといえる。あるいは，虚子は，この後，校正の機会が作れると考えていたのかもしれない（実現しなかった）。

このことは裏返せば，松山方言以外の箇所にも，数例ながら虚子の手入れがあることを認める

ことでもある。校正レベルと扱えるもの（F，G，L，C，O）が多いが，Bは「思ひ出したやうに言ひ出すと」を「思ひ出したやうに言ふと」に変えて「～出す」の重なりを正した例といえる。△判定としたDEも，Bに類似した例といえる。「狭い土地だから到底暮せるものではない。だから釣に行くとか，」を「狭い土地では到底暮せるものではない。其で釣に行くとか，」と変更しており，「だから」の重複が避けられている（「では」が重なったが）。Kは「清への返事をかいた。」を「清への返事をかきかけた。」とした例であるが，坊っちやんはこの返事の手紙を書くのを断念しており，「かきかけた」の方が理にかなっている。これらは単なる校正とは言い難い。ほんの数箇所ではあるが，虚子は本文を手直ししている。こうしたことが，『坊っちやん』にとっていかなる意味を持つのか，あるいは持たないのか，それについては多くの研究者とともに，私自身も考えていきたい。

注

(1) これまでの発表では，虚子の手入れを「修正」などとしてきたが，「訂正」「加訂」「修正」「手直し」にはどうしても「正す」というニュアンスが含まれるため，その意味合いが不要な場合には「変更」「手入れ」，追加だけなら「加筆」を用いることにする。

(2) 追加した数例によって，付した番号が変わっている。また，これまでの発表で虚子筆としてその後の論を進めるポイントとしてきたもので，今回確実に虚子とできなかった例がある。発表の主旨に関わってくるが，それについては別稿を予定している。

(3) 参照したおもな自筆原稿，自筆資料を以下に挙げる。原物と記していないものは複製，影印によった。

漱石

- 1906『坊っちやん』（『夏目漱石自筆全原稿　坊っちやん』番町書房1970）
- 1906『吾輩は猫である』第9回冒頭一枚（『複製近代文学手稿100選』二玄社1994）
- 1906『吾輩は猫である』第10回一部一枚分（『漱石全集』第一巻　岩波書店1936）
- 1906『吾輩は猫である』第10回一部一枚分（『新潮日本文学アルバム　夏目漱石』1983）
- 1906『吾輩は猫である』第11回末尾一枚（『漱石全集』第一巻　岩波書店1993）
- 1906『琴のそら音』冒頭一枚（『漱石全集』第二巻　岩波書店1994）
- 1906『草枕』一部一枚分（『漱石全集』第三巻　岩波書店1994）
- 1907『虞美人草』一枚（『漱石全集』第四巻　岩波書店1994）
- 1908『三四郎』冒頭二枚（『漱石全集』第五巻　岩波書店1994）

虚子

- 1907『俳諧一口噺』「感覚美」「美人論」各二枚（虚子記念文学館蔵原物）
  時期的には最も『坊っちやん』に近いがペンではなく筆。
- 1907「長塚節宛て書簡」（松山市立子規記念博物館蔵原物）
  書簡だが，『高濱虚子遺墨集』（求龍堂）所収のものより時期的に近い。
- 1912『子規居士と余』第2回冒頭一枚（『新潮日本文学アルバム　高浜虚子』1994）
- 1912『お丁と』（松山市立子規記念博物館蔵原物）
  拝見させていただいた後，第43回四枚目前半と第57回一枚目前半を写真撮影。
  表2はその撮影箇所から作成。
- 1912『子供等に』冒頭一枚（『複製近代文学手稿100選』二玄社1994）
- 1915『柿二つ』第2回一部半枚分（『定本高浜虚子全集』毎日新聞社1973）
- 1915『進むべき俳句の道』「雑詠評」（松山市立子規記念博物館蔵原物，『新潮日本文学アルバム　高浜虚子』1994に写真あり）

(4) 山下浩1994を山下（渡部）1994とするのは，山下論文の注2として渡部江里子氏が執筆した「『坊っちやん』原稿に対する虚子の手入れについて」によっているからである。山下氏の御好意により，渡部氏の卒業論文を目にすることができた。山下論文の注2には挙がっていないが，卒業論文で虚子筆とした箇所

があったので※を付した。

(5) 筆者は，具体的に実現した字の形状を「字形」と呼び，実現形の基となる観念（骨組）を「字体」と呼ぶ。「字」にはいくつかの「字体」が存在し（異体），それぞれの「字体」に基づいて「字形」が実現するが，「字形」にもいくつかのタイプが認められると考えている。それを「字形タイプ」と称する。「字」は原則として「　」，「字体」は／　／で示す。佐藤1998参照。

(6) 字体差か字形タイプの差かの判断はたやすくない。「も」の場合，横棒（点）の数（1か2か）が字体に組み込まれていれば字体差，そうでなければ字形タイプの差となる。一つにつながって縦向きになっていても，横棒2本という骨組の実現形ということも考えられる。そうした「くずし」が固定化して，横棒（点）一つの字体が成立したともいえる。個人レベルで異なる。

(7) 山下（渡部）に「お」「か」「く」「な」「も」「や」が漱石と虚子で異なるとあるが，渡部卒業論文（注4）では，それが具体的に説明されている。「な」のムスビの方向が異なることについての言及もある。渡部卒論は，他の原稿との比較・対照がなされていないが，『坊っちやん』内における非漱石的な仮名の指摘－「な」の他，「お」「か」「も」「や」「く」「の」「う」等についての説明－は，筆者とほぼ一致する。すなわち，筆者より早くにその成果を発表している。

(8) 読み返し時の加筆，修正については，筆記用具が変わる，筆記する速度が変わる等によって字形も変化をきたすことが考えられないでもない。そうしたことも念頭に置きつつ，以下の分析，判定を行なったつもりである。

(9) 22の「まだ」の追加は漱石自身。21は「御」の追加が漱石で，それに使って続けて虚子が「存知かなもし」とさらに手を入れたと考える。

(10) 10の「ほんま」を消したのも虚子であり，連動して次のN「本當の本當のつて」の「ほんとう」と「ほんま」とを逆順にしたのも虚子と筆者は考えているが，確実であるとは言い難い。39の「だらう」を消したのも虚子の可能性が高いと見る。29の「だ」→「ぞ」は明らかに漱石自身。66の「なもし」の追加は65を受けたものだから，66が◎なら65も◎でよいはずである。一応他に合わせて○としておく。

(11) 明治39年3月23日の書簡から，「ホトトギス」4月号の印刷，刊行に至る慌ただしさについては，青柳1981，山下1993参照。

主な参考文献

- 新垣宏一　1978　「『坊っちやん』の松山ことば修正の問題」（『四国女子大学研究紀要』23）
- 青柳達雄　1981　「解説」（『坊っちやん　「ホトトギス」初出本文』勉誠社文庫86）
- 山下　浩　1993　『本文の生態学　漱石・鷗外・芥川』（日本エディタースクール出版部）
- 山下　浩　1994　「新『漱石全集』（岩波書店）の本文を点検する」（『言語文化論集』39）
  同論文の（注二）「『坊っちやん』原稿に対する虚子の手入れについて」（渡部江里子）
- 渡部江里子1994　「漱石自筆原稿『坊っちやん』における虚子の手入れ箇所ならびに考察」（筑波大学卒業論文）
- 高木文雄　1999　『六書校合定本「坊っちやん」』（朝日書林）
- 佐藤栄作　1998　「漢字字体とは何か」（『日本語学』17－10）

（校正時補足）本稿成稿後、以下をまとめたので参照していただきたい。

- 佐藤栄作　2000　「『坊っちやん』原稿への虚子の手入れについて」（『愛媛国文と教育』33）
- 佐藤栄作　2001　「『坊っちやん』原稿の「なもし」－『坊っちやん』論の前に－」（『国文学 解釈と教材の研究』46－1　学燈社）

子規記念博物館前副館長日野正寛様ならびに石丸耕一様，虚子記念文学館館長高濱初也様には，虚子自筆原稿の閲覧等につきまして大変お世話になりました。また，愛媛大学名誉教授大西貢先生にはさまざまな面でご配慮たまわりました。厚く御礼申し上げます。

（2000年10月19日受理）

表①—1

番号	枚	行	新垣	山下	佐藤	
1	38	12	○	?	◎	温なる／あい／一行が
2	38	13	○	○	?	ずや（あろ）ずや
3	77	20	○	○	○	どうして／奥さん
4	77	20	○	○	◎	を（知）／ほんとうに／なさっ
5	77	20	○	○	◎	仲直り／（なんだのでなもし）／ふどい
6	77	22	○	○	○	、そホでもあった、
7	77	22	○	○	◎	あ（なた）
8	77	23	○	○	◎	仲有り／なさる
9	77	23	○	○	○	ぞ（もし）ど
10	78	4	○	○	○	本当ふもし
11	78	9	○	○	◎	仲有り／なさるに
12	78	9	○	○	◎	極つと（らい）の
13	78	10	○	○	○	、姉う、
14	78	10	○	○	◎	暗（なら）んどるぞなもし
15	78	11	○	○	◎	見（暗）なら／んどる／奥さん
16	78	13	○	○	◎	ずや／（なかなかなもし）／ずむ
17	78	18	○	○	○	ぞふもし

表①—2

18	78	20	○	○	◎	あなたの	
19	78	22	○	○	◎	「あなたのは	
20	78	22	○	○	◎	あなたのは	
21	79	1	○	○	◎	「なぜ知ったか」もし	
22	79	3	○	○	◎	「きっと何か知ったかもしれない	
23	79	3	○	○	◎	さいわいあなたの別嬪	
24	79	3	○	○	○	ざやのもしさ。	
25	79	5	○	○	◎	「ふといでそなもし。	
26	79	5	○	○	○○	「聞きんのもし	
27	79	8	○	○	◎	のなもし	
28	79	10	○	×	○	「大方	
29	79	10	○	○	○	名ぐもし	
30	79	12	○	○	○	ざやのもし	
31	79	17	○	×	○	「ほんまに	
32	79	17	○	○	○◎	さうぢやもし。	
33	79	18	○	○	○	なあもし	
34	79	20	○	○	○	のもし	
35	79	20	○	○	◎	あなたの	

表①—3

36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
79	79	79	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	81	81
20	21	22	6	8	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	23	2	9
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	?	○
◎	○	○	○	○	◎	?	○	◎	◎	○	◎	?	○	◎	◎	○	○
あなたを	ちもし	ざらのちもし	ぞちもし	ざやのちもし	懸命なて見ると、	まあようう考へて	ざやのちもし	出入をたしう様に	て不仕事ひさ	のちもし	ひますのよ	しときちがら、	替へょてし、	なもしのあなた、	ざやて、	知れん	ぞちもし

表①—4

54	81	18	○	○	○	ぞ おもし											
55	81	20	○	○	◎	強さう											
56	81	22	×	○	◎												
57	81	23	○	○	◎												
58	82	1	○	○	○	ぞ おもし											
59	84	6	○	○	○	の おもし											
60	84	6	○	×	○												
61	84	7	○	○	○	ぞ おもし											
62	85	16	○	○	◎												
63	97	7	○	○	○	ぞ おもし											
64	97	10	×	×	?	「ほん											
65	97	12	○	○	○	ぞ おもし											
66	97	13	○	○	◎	ぞ おもし											
67	97	15	×	○	◎	あ た											
68	97	15	○	○	○	ぞ おもし											
69	97	19	○	○	○	ぞ おもし											
70	97	22	○	○	○	し た ぞ おもし											
71	97	24	○	×	○	あし 達の											

表①—5

A2	A1		86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72
46	46	その他	148	141	133	126	126	99	99	99	99	99	99	99	98	98	98
12	10		11	10	15	6	4	15	13	11	10	9	6	4	23	5	3
—	—		○	—	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×
×	×		×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	?	○
×	×		?	?	?	○	○	◎	◎	○◎	○	◎	○	○	○	◎	◎
加藤	加藤		そもしと聞いり	そもしと	見うとと	ずがもしと	そもしと	置きがの	の	我慢ずがあるに	得そもしと。	てくれるら、	そもしもし	うもし	そもし	見とそこと	あがた

表①—6

	A3	A4	A5	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
	54	55	57	53	57	74	74	100	116	116	116	117	122	123	127	78	80
	11	6	11	18	10	8	9	8	4	9	18	18	8	6	11	5	19
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	×
	×	×	×	×	×	※	※	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	△	△	△	○	○	△	△	◎	◎	?	×	?	◎	○	?	?	○
	ね、かん藻氏	ね、かん藻氏	おい、藻君	云ふと、	宿の方は電話で	土地では	其で釣に	大きな云へ	行かうひ始めり	ちやんちきりん	おきなはれや	必ずあるまい	きうきかけ。	すれば伏ぶの	凡顛末ずまで	「ほんとう」本堂の本堂のつて	それぢや今日は人情様へ

表 ② — 1

		猫（九回冒頭）（＊最終回末）	坊（78枚目十全体から）	坊（表1の手入れ部分）	お丁（虚子）（＊子供等に）
あ		あ あ あ	あ あ	あ あ	あ あ
い		い い	い い い	い い い	い いい
う		う	う う	う	う う
え			え え え	え え	え
お	於1 於2		お お	お お	お お
か	加 可	う ゔ	う ゔ	か かゞ か	か か
き		き き	き き	き	き き
く	久1 久2	く	く く	く	く くく
け			け	け け	け
こ	己 古	こ ＊ち	こ こ	こ	こ こ
さ		さ さ	さ さ さ	さ さ	さ
し	之 志	し	し し し ち	し し し し	し し し

表 ② ― 2

す		す	す す	す	す
せ		せ	せ		せ
そ		*そ	そ ぞ	ぞ ぞ	そ
た	太多	*た た	た た た た	た だ	た た
ち		ち	ち	ぢ ぢ	ち
つ		つ	つ	っ つ	つ つ
て		て て で	て て で	て で	て て て
と		と と	と と	ど ど と	と と
な	奈1 奈2	な ふ ふ ふ	な な ふ ふ ふ	な な な な ふ ふ	な ふ ふ
に	仁尓	に に ゐ	に ゐ		に に (ゐ)
ぬ		*ぬ	ぬ	ぬ	
ね			ね ね ね	ね	ね
の		の	の	の の	の の
は	波者八	は は も も	は は は も む い		は は

表②—3

ひ		ひ	ひ ひ	ひ ひ	ひ ひ び
ふ		ふ	ふ ふ	ふ ふ ふ	ふ
へ		へ	へ へ		へ べ
ほ			ぽ ぽ	ぽ	ほ
ま		ま *ま	ま ま	ま	ま ま
み		み み	み み		み
む		む	む		む
め		*め	め め		
も	毛1 毛2	*も *も *も も も	も も も	も も も も	も (も) (も) (も)
や		や	や や	や や	や
ゆ		ゆ	ゆ		ゆ
よ	与1 与2	よ	よ よ	よ	よ
ら		ら ら	ら ら	ら ら ら	ら ら
り	利 里	り	り り り		り
る	留1 留2	る る る る	る る る る	る る	る る

表 ② ― 4

れ	礼連	れ *れ *れ *れ	れ れ れ れ れ	れ れ	れ
ろ			ろ ろ		ろ
わ			わ		わ
ゐ		*ゐ	ゐ ゐ		ゐ ゐ
ゑ					ゑ
を		を を	を		を を
ん		ん ん ん	ん ん ん	ん ん	ん
踊り字		*ゝ	ゝ		ゝ
踊り字		*〳〵	〳〵 〳〵		〳〵
連綿					*ゐ